

六 人生果して不如意か

「貰ふこと嫌でござぬると云ひながら、とらねばならぬくれて行く歳」嫌でも年はとらねばならぬが、併し正月は流石に嬉しいらしい。けれども、「皆人の年をとるとして喜べど、年に命をとられこそすれ」では餘り喜ばれもしますまい。今日は天氣であつて欲しいと思へば雨が降り、何卒一雨欲しいと思へば早天が續く。悪まれ者は世にはびこり、可愛がらるゝ者は世に顯れず。極めて金が必要な人には金がなく、有り餘る人の處へは自然と集まつてくる。美しいりかう娘は病身で、醜い馬鹿な野郎は風さへひかぬ。別れたくもない人には早く別れ、來ずとも好い奴は毎日來る。子供が欲しいと思ふ人には子が出來ず無くもがなと思ふ貧乏人は子澤山。花があれば嵐があり、月があれば雲がある困つたものだ。思ふ通りには一つもならぬ。「世の中は一つかなへばまた二つ、三つ四つ五つ六つかしの世や」。

但し翻つて考ふれば、ならぬで結構である。若しなつたら大變、人が思ふ通りになつて呉れるのはよいが、若し自分になつてやらねばならぬと來たら如何する。萬一人人が我を怨んで、彼奴病氣にでもなればよいと思ふと、忽ち病氣になり、地位を失へばよいと思ふと、忽ち地位を失ふ。早く死んで了へと思つと、直に自分が死なねばならぬでは、危険千萬ではないか。併し更に其様な事がなく、病氣するにはするだけの原因結果があつて病氣し、地位を失ふには失ふだけの原因結果の關係があつて地位を失ひ、死ぬるには死ぬるだけの原因結果の法則に従つて死ぬので、我儘な人間の思通りにはならぬでこそ有難い。そんなら如何しても思通りにならぬか。それはならぬ事もない、原因結果の道理さへ踏めばならぬ。

兎角浮世はまゝならぬ、まゝになるのは米ばかり

その米さへも上手に炊かなければ、黒焦になつたり、半熟になつたり、とても厄介である。茲一寸工夫を要する。

まゝにならぬとお櫃を投げりや、そこらあたりがまゝだらけ

儘になるものだと、自分の我儘勝手を投出してしまへば、そこに懸て儘なる道が開けてくる。こゝが禪宗流に云へばお悟り、真宗ではお慈悲に眼が開く。

惜しや欲しやと思はぬ故に、今は世界が我物ぢや

嘘と世界をくぐだいて後に、實の世界に住むがよい

如來の大悲に一雙眼を開いたら、人生の橋渡りも氣樂なもの。「念佛者は無碍の一道なり」。障なき一筋道が行ける。